

『それから』における呼称問題：漱石の自筆原稿の検討を通して

著者	孔 月, 李 麗
雑誌名	文学研究論集
号	33
ページ	1-12
発行年	2015-02-26
その他のタイトル	Significance of the Ways How the Characters are Called in Sorekara : A Case Study Based on Handwritten Manuscript by Soseki
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123687

『それから』における呼称問題

—漱石の自筆原稿の検討を通して—

孔 月、李 麗

はじめに

夏目漱石の『それから』¹は明治四十二年（一九〇九年）六月二十七日から十月十四日まで、『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に全百十回で連載され、明治四十三年（一九一〇年）一月に春陽堂によって初刊本が刊行された。『それから』は夏目漱石の中期の代表的な三部作の一作として、すでに様々な視点での研究が行われているが、『それから』の人物の呼称問題については、漱石の直筆原稿での検討はみられない。漱石の直筆原稿²の研究も少ないが、漱石の一部の作品に関して行われている。これらの研究は、主に『こころ』『坊ちゃん』『道草』などの作品に関するものが比較的に多くみられ、主に漱石の自筆原稿におけるルビの研究³に集中している。『それから』の自筆原稿についての研究はごく少なく、小松寿雄⁴の論がみられるが、主に『それから』の直筆原稿における振り仮名の問題と当時新聞連載の振り仮名との異同を考察する研究である。本稿で取り扱う呼称の書き換えの問題についての研究はほとんど行われていない状況である。

『それから』は十七回からなる長編小説であるが、その原稿は「十二の一」がその前回の「十一の九」と同じく「第六十五回」と誤記され、以後一回ずつずれて百九回となっている。また総枚数も実際は九百六十三枚だが、原稿の右上に記された漱石自筆の数字に重複や脱落があり、最後の「十七の三」の十一枚目の最終番号は「924」となっている。

夏目漱石は作品を完成する際、スピードが例をみないほど速いことが、『それから』の執筆期間の短さからわかる。『漱石研究年表』⁵によれば、『それから』は五月三十一日から書き始め、八月十四日に脱稿した。この間の進度はとても速いと言える。また、六月十九日に二十回分の原稿を『東京朝日新聞』に送り、七月七日に続きを五十回まで送っている。そして、七月十三日に続きの五十七回か五十八回まで、七月十六日に六十三、四回目を書き、八月五日には執筆が結末に近づき、八月九日に『それから』の第百回を半分ほど書いていた。それから書き直しが行われ、八月十四日の夜に『それから』が脱稿する。そのためか、「漱石は、いったん作品を発

表するとそれ以降は本文の校正を自ら手がけて新たな手を入れたり、いわんや作品を変質させかねない改稿をするということはほとんどなかった」⁶とする指摘がみられる。ただし、自筆原稿をみると、創作段階においてすでに訂正が行われていることがわかる。その改訂箇所は、物語のプロットにかかわる訂正ではなく、表現における訂正が多い。たとえば、形容詞を追加している部分が多い。例を挙げると、「海の底に立ってゐる女を画いた」（五の一）を「海の底に立ってゐる脊の高い女を画いた」など、描く対象を具体的に描写するための形容詞の追加が目立つ。そして、「其時」、「其晩」、「其日」など、場面の時間を限定する言葉の追加やテキストの時間を精密に呈示するための訂正が比較的多くなされている。すなわち、『それから』の自筆原稿では文章表現の書き直しが多くみられる。

本稿で取り扱う登場人物の呼称の書き直しは、形容詞や時間名詞の訂正に比べると多いとはいえないが、「三千代さん」を「三千代」、「奥さん」、「梅子」を「姉」から「嫂」、「親父」を「父」「お父さん」などに書き換えた跡が残されている。これは単純に文の前後の呼称を統一させるために書き換えたようにも捉えられるかもしれないが、これらの書き換え箇所は登場人物の人間関係を読み取る上で重要な情報であるように思われる。また、場面に対応する人物呼称の正確度への拘り、漱石の創作態度が窺える。

そこで、本稿では『それから』の出版されたテキストと自筆原稿を辿りながら、テキストに登場する三千代、梅子、長井得などの人物の呼称、「子供」の書き方など、自筆原稿における書き換えに焦点をあて、これら登場人物の呼称の生成について考察する。この作業を通して、『それから』の自筆原稿における登場人物の呼称の書き換えが、主人公と登場人物間の微妙な関係の変化や、心理的距離の変化を反映しているという結論を導き出す。

一 呼称の書き換えその一：「三千代」、「三千代さん」、「奥さん」

『それから』は結婚三年目の夫婦平岡常次郎と三千代がもう一度東京に戻るところから物語が開始されるが、夫婦を出迎えるのは三十歳の独身高等遊民の長井代助である。代助は、過去の三千代に対しての愛の炎を再び燃やし、自分と三千代の自由恋愛が「天意」に従っての「自然の愛」だと信じている。一方、代助の父親の長井得は息子を地主の娘さんとの政略結婚を推し進める。『それから』は主人公代助と三千代との「自分の掬えた因縁」の恋愛を中心として展開し、一方父親からの「先祖の掬らえた因縁」に反発するという二つのモチーフが、互いに交錯しながら展開されている。

まず、女主人公の三千代の呼称について検討する。『それから』のテキスト全体を調べると、三千代は「三千代」「三千代さん」「奥さん」など語り手や代助の立場での語りによって呼び方が異なる。第二回の末尾において代助は初めて「三千代さんは何うした」と平岡に問いかける。代助はいつでも三千代のことを「三千代さん」と、三千代が未婚の頃のように呼んでいた。しかし、自筆原稿には「三千代さん」を「三千代」に書き換えられた箇所が目立つ。たとえば、自筆原稿「四の四（148）」の最初の部分では「三千代さんは東京を出て一年目（平岡）に産をした」と初めは「平岡」と書かれたのが消され、「三千代は東京を出て一年目に産をした」に書き直されている。「三千代さん」を「三千代」に書き換えたのは、この部分が語り手の視点で語ったからであろう。確かに語り手の視点からすれば「三千代」という人物を解説する際の呼び方として不自然ではないが、原稿「四の四（149）」では「平岡は三千代さんが直に代助に話した所である」から「是は三千代が直に代助に話した所である」に改めた。すなわち、同じ語り手の視点であるが、最初は「三千代さん」と書き、のちに「三千代」に書き換え、「平岡」は削除されている。さらに、原稿「四の四（150）」における「昔三千代さんが細君にならない前、代助はよく三千代さんの斯う云ふ目遣いを見た。さうして今でも善く覚えてゐる」、「四の四（151）」の「三千代さんは今代助の前に腰をかけた」など、ここにおける「三千代さん」もすべて「三千代」に直されている。そして、「昔」は削除され、「今」が追加されている。

代助にとって、三千代は恋の対象として意識している存在であり、昔からいつも彼女を「三千代さん」と呼び、「三千代さん」ということばのもつ記号性は、三千代に対する昔の記憶と結びつくものである。すなわち代助が思う三千代は昔の三千代と変わりが無いということである。それは「十三回」の代助と平岡の対話で窺い知ることができる。

「君は三千代を三年前の三千代と思っているか。大分変わったよ。ああ、大分変わったよ」

「同なじだ、僕の見る所では全く同じだ。少しも変わっていやしない」

「だって、僕は家へ帰っても面白くないから仕方がないじゃないか」

「そんなはずはない」（十三 213 頁）

この引用からわかるように、「三千代さん」は代助の記憶の中の三千代である。原稿において「三千代さん」と書き、「三千代」に書き換えたのは語り手の語りと関係があるが、「昔」と「今」にも関係があるとみられる。代助は「三千代が平岡

に嫁ぐ前に、既に自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰め」（十三 208 頁）でいた。この書き直しと対応する「平岡」が削除されたのも、三千代と平岡の冷め切った関係を、真の夫婦関係だと心から認めたくない、「今」の代助の心情を語り手が代弁して語っているからであろう。そして代助からみれば、三千代は平岡の私物ではなく、独立した人物である。代助が平岡に三千代との関係を告白する前に、次のように言っている。

「矛盾かも知れない。しかしそれは世間の掟と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がった夫婦関係とが一致しなかったという矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫まる。しかし僕の行為その物に対しては矛盾も何も犯していないつもりだ」

「他の妻を愛する権利が君にあるか」

「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件じゃない人間だから、心まで所有する事は誰にも出来ない。本人以外にどんなものが出て来たって、愛情の増減や方向を命令する訳には行かない。夫の権利は其所までは届きやしない。」（十六 285 - 286 頁）

この引用から、「平岡」が削除されたのは、三千代を平岡と結びつけることを避けるため以外に、代助が憧れる「自然の愛」とも関係があると考えられる。代助からみれば、三千代は精神的に誰にも附属しない、自由な人間であり、誰かの所有物ではない。

その一方、原稿「八の四」には「代助は懷から例の小切手を出した。二つに折れたのをそのまま三千代の前に置いて、奥さん、と呼び掛けた」とある。テキストの中で代助は三千代に一度だけ「奥さん」と呼びかける。この場面は嫂から貰ったお金を三千代に渡す時の呼び方である。三千代は「ありがとうございます。平岡が喜びますわ」と答える。この場面は三千代が平岡の妻としての身分で応じている。生活費に困窮している平岡に言い付けられ、代助に借金の依頼をしにきた三千代を見ながら、代助は三千代と平岡の「世間の掟と定めてある夫婦関係」を、その瞬間認めずにはいられなかった。しかし、「三千代の歡心を買う目的を以て、その手段として金を捻える気はまるでなかった」（七 101 頁）。そのような代助の複雑な気持ちを表現するには、「三千代さん」ではなく、「奥さん」のほうがその場ではもっとも適切だったのであろう。

二 呼称の書き換えその二：「梅子」、「姉」と「嫂」

『それから』の原稿において、代助の嫂である梅子に最初に言及したところは「二の二」で、「嫂を連れて音楽会へ行くはずのところを断って、大いに嫂に気を揉ました位である」とある。この引用で「嫂」は「あによめ」と振り仮名が振られ、代助が三年前に平岡新夫婦と別れた後の地の文における呼び方である。また、「嫂」についての公式的な紹介は「三の一」の冒頭の「梅子という夫人に、二人子供が出来た」にみられるように、ここでの「梅子」は語り手の視点からの呼び方である。代助の視点を通しての呼び方は、「九の二」で役者になれという嫂の話しに、「代助は何にも云はずに、洋蓋を姉の前に出した」と「姉」という呼称が使われている。このように、テキストでは嫂の梅子に対する呼称が「嫂」、「梅子」、「姉」と交錯して表現されている。その中で、書き換え箇所がいくつかあることに注目したい。原稿「七の三」に「すぐ西洋間の方へ来て、戸を明けると、梅子がピアノの前に腰を掛けて両手を動かしていた」とあるが、最初は「梅子」と書かれ、後に「嫂」に直されている。「十一の八」においては「代助はこの先姉がこの事件をどう発展させる気だろうと考えて、少々弱った」とあるが、ここでの「姉」も「嫂」に書き換えられている。そのほかにも、「十四の三」において、「代助は固より姉の言葉を側面へ摺らして受ける法をいくらでも心得ていた」の「姉」が「嫂」に直されている。

まず、「梅子」という呼び方は上記の引用からもわかるように、語り手の視点を通しての呼び名で、「嫂」は代助の視点からの呼び名であることはいうまでもない。ただ、なぜ二箇所の「姉」を「嫂」に書き換える必要があったかという疑問が生じてくる。この問題を解決する前に、まずテキストにおける代助と嫂の人物関係を分析しなければならない。

梅子はテキストにおいて、「この嫂は、天保調と明治の現代調を容赦なく継ぎ合わせたような一種の人物である」（三 31 頁）と紹介される。ここでいう「現代調」は嫂のライフスタイルを反映している。嫂はフランスの織物を注文したり、西洋の音楽が好みである。一方、高等遊民の代助の日常生活は、次のように描かれている。「熱い紅茶を啜りながら焼き麴麴にバタを付けている」（一 9 頁）とあるように、代助はハイカラな生活をしている。ここで代助のライフスタイルは「現代調」の嫂に似ているといえる。ほかにも、「小供のうちから日本在来の芝居を見慣れた代助は、無論梅子と同じように、単純なる芸術の鑑賞家」（十一 170 頁）で、時々嫂と一緒に音楽会に行ったりする。ここからは、代助と嫂は相性と趣味だけではなく、当時の明治文化についてもお互いに同じ認識を共有していることが窺える。

さらに、第三回の最初に「誠吾とこの姉の間にもう一人、それからこの姉と代助

の間にも、まだ一人兄弟があったけれども、それは二人とも早く死んでしまった」とあるが、語り手によって、代助が長井家の末子であることが語られる。末子は、家庭の中で母から庇護される対象のはずであるが、代助は「母も死んでしまった」ため、長井家の嫁として、家庭生活を維持する人は無論「嫂」である。だとすれば、母親の代わりを務めるのは嫂と考えられる。これは、嫂の梅子と代助の会話からも認められる。テキストの「三」において、「あなたは、其所にいらっしゃい。少し話しがあるから」（45 頁）とあり、「代助には嫂のこういう命令的言葉が何時でも面白く感ぜられる」（45 頁）と語られている。嫂の梅子は代助に母親が子供に対する命令的言葉を使用し、母の愛に欠けている代助はそのような口調に反感を持つというより、逆に「面白く」感じている。要するに、嫂は母親的存在であり、実際は義弟と義姉という距離感を持つ関係にありながらも、実の姉と弟のように仲がいいことがわかる。従って、「母」的存在であり、「姉」的存在でもある梅子のテキストにおける呼称は、場合によって変わる。だとすると、前で挙げた原稿の「姉」から「嫂」への書き換え（「十一の八」と「十四の三」）の箇所も、場合と状況による書き換えだと考えられる。前で挙げた「十一の八」の「代助はこの先姉がこの事件をどう発展させる気だろうと考えて、少々弱った」の箇所の「姉」は「嫂」に書き換えられ、「この事件」とは、政略結婚の事件を指している。さらに、その続きのところに「しかしこの姉までが、今の自分を、父や兄と共謀して、漸々窮地に誘って行くかと思うと」（173 頁）とあるが、ここでの「姉」はそのままになっている。この二つの部分を合わせて考えると、つねに自分の味方であった梅子が、今回は父と兄と一緒に政略結婚に賛成し、代助はますます味方を失い、孤立の状態に陥っていく。確かに、長井家で代助の気持ちが一番理解する人は「母」のようで、「姉」のような梅子であるが、梅子も長井家の嫁として義父や夫の意見に反対できなかったとみられる。また、家族の繁栄と発展のために、金持ちの佐川の娘と結婚させることに賛成するしかなかったのであろう。そうになると、この場合、梅子はすでに代助を守ってくれる存在としての「姉」ではなく、そのかわりに「嫂」に書き換えることによって、代助とともに読者にも「嫂」に距離感を感じさせる。すなわち、ここでの「嫂」は代助にとって親密な「姉」的存在ではなく、疎遠な「義姉」となる。要するに、自筆原稿における「姉」から「嫂」への書き換えは、場合と状況によって変化する人物間の関係—代助と梅子の親疎関係が反映されている。

三 呼称の書き換えその三：「親父」、「父」、「御父さん」

『それから』の自筆原稿には、三千代と梅子の呼称の書き換えがみられる以外に、代助の父親の長井得の呼称の書き換えもみられる。父親の呼称の書き換えは、原稿においては少ないものの、原稿と刊行本両方において、語り手による父親の呼称が多様に使われ、場面によって使い分けていることが確認できる。まず刊行本のテキストからみていく。

第一回の最終部において、代助が書生の門野から、郵便物の端書と封書を渡される場面が描かれている。一つは平岡からの端書で、もう一つは代助の父親からの封書である。この二つの郵便物は同時に代助の手に届いたが、「封書の方を取り上げると、これは親父の手蹟である」（19 頁）ことに気づいた代助は、それを読まずに、平岡からの端書を先に読んだ。また、「妙な顔をし、端書と封書を見比べた」（19 頁）あと、父親のところを先に訪ねるのではなく、平岡のことを優先することにした。引用での「親父（おやじ）」という呼称は、テキストの中で代助の父親がはじめて登場する時の呼称であり、代助の立場からの呼び方である。また、「親父」がテキスト全編を通して最も多く使われている。

そして、第三回の最初の部分では、父親の長井得が次のように紹介される。「代助の父は長井得といって、御維新のとき、戦争に出た経験のある位な老人であるが、今でも至極達者にいきている」（30 - 31 頁）。これは語り手の視点を通して、代助の父親長井得が紹介される部分で、「親父」ではなく、「父」が使われている。

第三回で一番多く使われているのは代助の立場からの「親父」であるが、「父」以外に「御父さん」という呼称も使われている。「御父さんからまた胆力の講釈を聞いた。御父さんのように言うと、世の中で石地蔵が一番偉いことになってしまうようだねといって、嫂と笑った事がある」（34 頁）とあるが、ここでの「御父さん」の呼称も同じく代助の立場に立った語り手の言い方である。

以上のテキストにみられる「父」、「親父」、「御父さん」の呼称は、それぞれ語り手、代助の立場からの語りによって、父親の人物像が解説されている。では、なぜ同じ回に父親の呼称がこれほど多様に使われているか、その原稿の書き換えに照応しながら考えてみる。

代助にとって、父親の長井得はやかまし屋である。父親の話を聞かせることは彼にとって非常に憂鬱なことである。それで、父親の言いつけを守らないばかりか、いつも父親を馬鹿にしている。この点に着目すれば、代助がなぜ父の封書ではなく、平岡からの端書を先に読むのが分かる。そして、代助の立場から一番多く使われている呼称の「親父」は、父子間の親密な関係を示しているのではなく、観

念が旧い父親をからかう意味で使われている、といったほうがふさわしいと考えられる。

このように、テキストでは父に対する呼称が「親父」、「父」、「御父さん」と交錯して表現されているが、自筆原稿にも父親の呼称についての書き換え箇所がいくつか確認できる。たとえば、第九回の最初の部分には「代助はまた[父]から呼ばれた」、「代助は不断からなるべく[父]を避けて会わないようにしていた」(126 頁)とある。ここでの「父」の呼称は、語り手の視点から代助と父親の関係を語っている。つまり第九回では最初から語り手の視点を中心としてテキストを語らせている。「[父]は習慣に囚えられて、いまだにこの教育に執着している」、「代助は[父]に対するごとに、[父]は自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足らない愚物か」(127 - 128 頁)、「[父]は唐机の前に座って」、「[父]は詩が好きで」、「[父]はまず眼鏡を外した」(131 - 132 頁)などから見れば、「父」という呼称は第九回を貫いている。

しかし、同じ第九回においても、代助が父親のところを訪ねる場面では「代助はそれから後は、一言も口を利かなくなった。ただ謹んで親父のいうことを聴いていた。親父も代助からこういう態度に出られると、長い間自分一人で、講義でもするように述べて行かなくてはならなかった」(132 頁)の「親父」が、自筆原稿では「代助はそれから後は、一言も口を利かなくなった。ただ謹んで親父のいうことを聴いていた。[父]も代助からこういう態度に出られると、長い間自分一人で、講義でもするように述べて行かなくてはならなかった」に改めた。最初は「親父」が二回使われていたが、書き直しによって、前者は変わらず、後者の「親父」だけが「父」に書き換えられている。引用の場面は代助が謹んで父親が言うことを聞く場面である。つまり前者の「親父」は代助の立場から語られ、「講義でもするように」言いつける父親は代助にとっては、いつものようにやかまし屋である。したがって、前者の呼称は書き直さず、「親父」のままにしておいたのであろう。そして、「講義」のような父親の話は、代助の結婚問題をめぐるものであり、代助の認識ではなく、父の気持ちを表現しているため、後者の「親父」を「父」に書き換えたと推測できる。

以上自筆原稿でも確認してきたように、『それから』のテキストでは、同じ父親でも「親父」、「父」、「御父さん」など、父親の呼称が多様に使われ、書き換えが行われている。このことから、呼称のニュアンスの違いをもって、場面や人物間の関係、人物の心理に表情を付与しようとした、作者の細かい洞察と拘りが反映される。

四 「子供」と「小供」の書き分け

『それから』の直筆原稿をみると、「小供」と「子供」の書き分けがはっきりして

いる。これは正確に言えば、前の三節で取り扱った呼称の書き換えの問題ではないが、漢字の使い方に対する作者の拘りがみられる。この現象は単に『それから』にだけ現れるものではなく、漱石のそのほかの作品にもみられる現象であることが、すでに先行論文において言及されている。

「こども」を辞書で調べるとわかるように、どの辞書にも「子供」という漢字しかなく、「小供」は『広辞苑』『大辞林』『日本国語大辞典』などの大型辞典を探しても出てこない。

「子供」と「小供」の使い分け問題については、『漱石全集』（1993）の編集者である秋山豊の『直筆で読む「坊っちゃん」』に興味深い指摘⁷がみられる。秋山豊の解説によると、『坊っちゃん』全体の中では、「小供」が十一回出てくるのに対して、「子供」は一回きりだと述べる。そして、「小供」は二つの意味に分けられるが、そのなかで「親」に対する「子」の意味ではなく、「自らがまだ小さかった頃」、すなわちまだ大人になっていなかった頃を指して使われている例は一つしかみられない。残りの十例の意味は、いずれも「大人」に対する「こども」であると指摘し、その書き分けには根拠があつてのものだという。

その一方、『坊っちゃん』の原稿にみられる書き分けが、漱石の全作品に通用することに疑問を抱き、『吾輩は猫である』から実例を挙げ、『猫』の中の「小供」は、いずれも「子供」と同じ意味で使われていることに言及する論⁸もみられる。

さらに、「はじめに」で触れた山下浩は「漱石の文字に対するこだわりは「小供」一つとってみてもわかる。親に対する子を意味する場合には「子供」と書く場合もあるが、おとなに対するこどもの場合にはほとんど例外なく「小供」になるといってよい」⁹と言っている。

では、本稿で扱う『それから』ではどうなっているのであろう。本節ではテキストから実例を引き、分析することによって、その書き分けの意味を探ってみる。

まず、「子供」と「小供」が書き分けられている箇所を一例ずつ引用する。

「子供」の例：

梅子という夫人に、二人の子供が出来た。 (三の一)

「小供」の例：

「何、姉さんが辟易する程じゃない。——時に今日は大変静かですね。どうしました、小供たちは。」

小供は学校です。」 (三の六)

ここで、梅子に対する子を意味する場合には「子供」で表現し、代助と梅子など

「大人」に対する「子供」は「小供」と書いていることがわかる。そのほかの例を挙げると、「三千代は東京を出て一年目に産をした。生まれた子供はじき死んだ」(四の四)での「子供」は、同じく親に対する子を意味する「子供」である。大人に対する子供の例になると、次の箇所を確認できる。「小供のいう事だから、能く分からないが」(六の三)、「小供を抱いた一人の男が、地震だ地震だ」(八の一)などのように、ここで使われている「小供」は実際の年齢と関係がある呼称である。代助にとって幼い誠太郎も、知らない男が抱いた小さい子も、「大人」からみて「子供」である。

しかし『それから』において、「小供」と書く場合は、実際の年齢と関係があるだけではなく、心理の年齢とも関係があることが推測できる。たとえば、「平岡が代助を小供視する程度に於て、あるいは其れ以上の程度に於て、代助は平岡を小供視し始めたのである」(二の五)とある。この箇所は、中学時代から代助と兄弟のように親しく往来していた代助と平岡が、三年後の「今」はお互いの変化と言動に言葉が通じない何かを感じた時の場面である。ここにおける「小供」は「大人」に対する「子供」の場合を意味する「小供」ではなく、心理年齢が幼い子を意味する「小供」と言える。

一方、「親」に対する「子」を意味する場合には「子供」と書かず、「大人」に対する「小供」で表現することがしばしばある。いくつか例を挙げる。

「こんなに動く時は小供のない方がかえって便利でいいかも知れない」

(二の五)

三千代は小供の着物を膝の上に乘せたまま、返事もせずしばらく俯向いて眺めていた。

(六の五)

話は死んだ小供の事をとうとう離れて仕舞った。

(六の五)

けれどもまた淋しい顔をして、責めて小供でも生きていてくれたらさぞよかったろうと〔後略〕

(八の四)

以上の例に書かれている「小供」はいずれも三千代と平岡との間に生まれてなくなった子供のことであるが、ここでは「大人」に対する「小供」の表現で、「親」に対する「子供」ではない。なぜなら、子供は夫婦関係の証拠であるが、三千代と平岡の子供は生まれてすぐなくなったため、三千代は世俗でいう子供の母親にはなっていない。そして血縁関係によって、平岡と三千代を結びつける子供がいないうことで、三千代と平岡の夫婦関係はさらに冷め切ってしまう。したがってここでは「小供」と書くことによって、大人と子供の距離感が際立ち、親子の親密関係が読み取

れなくなる役割を果たしている。

以上、この節では自筆原稿における「子供」と「小供」の書き分けの問題について、全部ではないが、例を挙げ、『それから』のテキストにおいてどのように使われているかを考察した。結論として、『それから』において「子供」は「親」に対する「子」の意味で使われ、「小供」は「大人」に対する小さい「子」の意味があるほかに、心理年齢が小さい、という場合にも使われていることが、テキスト分析を通して確認できた。

おわりに

本稿では、主に『それから』のテキストにおける三千代、梅子、長井得、この三人の登場人物の呼称の原稿における書き換えに注目し、分析を通してその書き換えが人物間の微妙な関係、心理を知る上で重要な手掛かりとなっていることがわかった。自筆原稿における「三千代さん」から「三千代」への書き換えは、昔からずっと恋していた女性としての「三千代」と友人の妻、既婚者としての「三千代さん」に対して、「三千代」は精神的に誰かの附属物、所有物ではなく、一人の独立した個体としての意味が付与されている。また、梅子と父親の呼称の書き換えからは、家族の利益にかかわるかどうかによって変化する家族間の親疎関係が反映される。家族間との距離感、あるいは上下関係を表す場合は、感情色彩がない「嫂」、「父親（おやじ）」に書き換えている。ただし、梅子との関係においては「姉」「嫂」によって変化する親疎関係がみられるが、父の呼称の書き換えにおいては「父」「お父さん」は一般的な呼び名で、親しい関係を表すべき「親父」は、かえって父との心理的ギャップ、衝突を表していることがわかる。また、「子供」と「小供」の漢字の書き分けからも、言葉に異なるニュアンスを付与しようとする作者の拘りがみられる。したがって、漱石の自筆原稿における人物呼称の細かい書き換えは、主人公代助が三千代との「自分の拵えた因縁」を成就させる過程における心の揺れ動きや家族との葛藤および対立関係などを際立たせる役割を果たしているといえよう。

注

- 1 本稿のテキストは、『それから』（岩波書店、2013）を使用した（この版本の底本は、『漱石全集』第四巻、岩波書店、1985である）。テキスト引用で（ ）内の漢字数字は回、算用数字は頁数を指す。また、テキストの引用にある傍線と口は筆者による。
- 2 十川信介編『漱石自筆原稿 それから』岩波書店、2005（阪本龍門文庫所蔵『それから』

原稿の複製本)。本論において自筆原稿の引用は()内の漢字数字は回、算用数字は頁数を指す。

- 3 夏目漱石のルビ(振り仮名)については、京極興一に広範囲で詳細な研究があり、京極『近代日本語の研究—表記と表現—』東宛社、1998)にまとめられている。また田島優『近代漢字表記語の研究』和泉書院、1998)、同(『漱石と近代日本語』翰林書房、2009)、今野真二(『振り仮名の歴史』集英社、2009)、佐藤栄作(『『道草』の書き潰し原稿と最終原稿の文字・表記』『国語文字史の研究』10、和泉書院、2007)、同(『『道草』書き潰し原稿と最終原稿の比較—ルビ、送り仮名、漢字字種、類字する諦—』『愛媛国文と教育』39、2007)などに取り上げている。
- 4 「漱石直筆原稿『それから』の振り仮名」『近代語研究』第15集、武蔵野書院、2010 347—359頁
- 5 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』集英社、1984 526、538頁
- 6 山下浩『本文の生態学—漱石・鴎外・芥川』日本エディタースクール出版部、1993 4頁
- 7 秋山豊編『直筆で読む「坊っちゃん」』集英社新書、2007
- 8 上野恵司「漱石用字・用語拾零 27-30」『ことばの散歩道』白帝社、2013
- 9 同注6 6頁

参考文献

- 1 秋山豊編『直筆で読む「坊っちゃん」』集英社新書、2007
- 2 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』集英社、1984
- 3 石出靖雄「漱石中期作品の表現—『それから』の語り手の特徴—」『早稲田日本語研究』16、早稲田大学日本語学会、2007・3
- 4 上野恵司「漱石用字・用語拾零 27-30」『ことばの散歩道』白帝社、2013
- 5 小松寿雄「漱石直筆原稿『それから』の振り仮名」『近代語研究』第15集、武蔵野書院、2010
- 6 十川信介編『漱石自筆原稿 それから』岩波書店、2005・9
- 7 夏目漱石『それから』岩波書店、2013
- 8 山下浩『本文の生態学—漱石・鴎外・芥川』日本エディタースクール出版部、1993